OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ひとと会う、外に出る、ともに生きる
Author(s)	荻野, 亮一
Citation	臨床哲学のメチエ. 2017, 22, p. 76-82
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68185
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ひとと会う、外に出る、ともに生きる

荻野 亮一

これを学ぶ理由を教えてください、ときかれることがある。ただ、理由を知りたいという場合もあるだろう。たとえば、現代文の授業で、高校生と坂口安吾の「文学のふるさと」を読む。なぜ、この文章が選ばれたのか、この文章を読むことで私たちがどのように変化するのか、知りたいと思う。しかし、同時にこの問いには、何か見返りを期待する響きが感じられるときもある。「私たちはこの文章を読むことで何を得ることができますか」　問いはこのように置き換えられる。このあたらしい問いをつらぬくのは、素朴な交換原理である。私たちは文章を読むために時間を割く。あたまをはたらかせる。つまり、自分の「はたらき」を教室に提出する。「はたらき」と引き換えに、たとえば、知識を得る、成績を得る。そうして交換が成立する。定まった価値のものを互いに交換することが経済の原点であるならば、ここにはプリミティブな経済が成立している。この経済における商品は学びである。学びが商品化しているのだ。この事態をどのように評価するにせよ、いま学校でおこなわれる学びのほとんどは、このような交換原理によっている。

授業がある。教員は授業をする、生徒はその時間、教室にいなければならない。それぞれ、その対価として賃金を得る、出席や成績を得る。ここで行われているのは、学びの名をかりた労働である。子どもたちは、教室にいること、課題を提出すること、あるいは、試験を受けることによって、それぞれの「はたらき」や能力に応じ、評価という報酬を受けとる。教員は授業をするという「はたらき」をなすことで、月々きまった給与所得をえる。この状況は教育の市場化ともよぶべき事態だ。教育の市場化は、今日あまりに当たり前の状況になっている。

だから、子どもたちは報酬が定かでない学びに対して否定的な態度をとるようになる。家庭から多くの資本を投下された子どもたちは塾や予備校へ通い、支払った費用に応じて学力を獲得する（ことになっている）。そのような労働、商品としての学びに慣らされた子どもたちにとって、中心的な関心事は、費用に応じて、あるいは自分の働きによって、どのような学びが得られるのか、知識が交換されるのかということである。このとき、対価のはっきりとしない、交換原理になじむことのない学びは市場から逸脱したしろもの、商品としては流通させるのに適さないものだということになる。したがって、大学入試の過去問を演習し、どうすれば傍線箇所の理由を正しく記述できるかという授業は、商品としてもてはやされるが、「文学のふるさと」を読む時間はますます肩身の狭い思いを強いられることになる。

しかし、学びとは実のところ、市場と交換原理になじむものではない。それは学びが未来と関係しているからだ。学びはいまの私ではなく、明日の私に向けられている。そして、当たり前だが、明日のことは、はっきりしない、定かではない。確定していない。これは、未来は本来その価値が明らかでないということを意味する。市場化された教育において、ふつう価値が明らかでないものを流通させることはかなわない。だから、そこでは、未来をあたかも確実なもののようにみせかける。たとえば、慶應義塾大学の合格を約束、次の定期試験の５教科平均点の 15 点アップを保証、というように。未来を交換可能な商品におきかえるのだ。この先取りされた未来という発想は、私たちの可能性やかけがえのないものまで市場にゆずりわたすという恐るべきことなのだが、いともたやすく悪事は行われる。

私は、とりわけ市場化された教育になじんだ高校生たちに向けて、そのような商品化された学び、市場化された教育に対抗するオルタナティブな学びを届けたいと思った。それは単に教育の市場化への抵抗という地点にだけ留まるものではない。それは未来を、決まりきった道

筋から、私たちの手へと取り戻し、可能性へ向けてもう一度解き放つためのたたかいなのである。洛星高校の生徒たちには多くの場合、美しい未来が約束されているように思われる。しかし、それは「約束された」未来だ。交換される決まりきった時間である。そのとき、それは未来のふりをした何か別のものである。だから、私は不確かな未来のための教室をつくろうと思った。

九九がわからないと３年生の算数はわからないというような着実に積み上げられ、交換へと方向付けられた学びとは別の学びの仕方を構想する必要がある。そのような学びのあり方のひとつが、アートを通じた学びである。もちろん、アートの世界にも市場は巧妙に侵入しており、事態は冷静に検証されなければならないが、それでもまだアートには随分と余裕がある、あそびがある。アートはよくわからないものを許容する。アートは確実な交換になじまない。だから、アートはどこか未来に似ている。とはいえ、アートに答えがないというのはよくいわれることだが、このことは慎重に考えられなければならないだろう。作品は、作家によって考え抜かれた末、制作される。安易な学びのユートピア、オルタナティブとして語られる、こたえのないアートへの期待や共感は、この作家の考え抜くというプロセスを無視した、いささか制作という行いに対する敬意の欠けた発想であると言わざるを得ないからだ。しかし、それではアートには通常の意味でのこたえが備わっているのか、といえば、そうでもない。考えるという仕方ではどうしても届かない、形を得られないものが残るので、作家はそれを芸術作品にするのだった。だからたしかに、考えるという仕方では到達することのできない場所を志向してつくられたもの、という意味で、やはりアートは「こたえのない学び」のためのメディアなのだともいえるかもしれない。

洛星高校でアートの授業をすることには、もうひとつのねらいもあった。2012 年度、私はアシスタントとして洛星高校における授業に参

加をしてきたが、教室では「学力」に秀でた（商品化された学びに上手に適応してきたともいえる）生徒たちが、ことばによって、とても雄弁に「正しい」ことを語る様子を目にしてきた。しかし「正しい」ことを、ことばで語ることがいつでも他者との協同を可能にするわけではない。それどころか、ことばで考えるのとは別の仕方で、たとえば、ともにものをつくるという仕方で、あるいはともに身体をつかうという仕方でひとは誰かと関わることがある、関わることができる。ことばで考える／関わる仕方だけが肥大化していけば、そこには雄弁だが、どこか空疎な人間がうまれてしまう。そしてまた「正しい」ことが「正しい」仕方では伝わらないこともある。それどころか、大文字の「正しさ」によって傷つけられてきたひとにとって「正しさ」はときにそのままでは受け入れがたいものでさえある。「正しさ」とはことなった正しさの可能性を想像すること。「正しさ」の手前で、いま、ここで生きているひとに思いを致すこと。カトリック校である洛星高校において「小さくされたひとと共にあること」を学ぶことが、教育課程におけるひとつの重要な目標であるとするならば、ここまでに述べてきた試みはそれと合致するものでもあるだろう。ことばで考えるとは別の仕方で表現の回路をきりひらくこと、チャンネルを増やすこと、それはまだ知らない他者への倫理を培うことでもある。

洛星高校の教室で私たちはアートで学び、アートを学ぶことを通じて、未来を学んでいたのではあるまいか。未来を取り戻そうとたたかっていたのだと私は思う。考えるだけでない、全身で世界と向き合う、かかわる、表現をする。作品を発想するプロセスで、批評する道行きで、確かに彼らのまなざしはいきいきとしていた。

現代美術作家の北野さんを招き、いっしょに授業をした時間、はじめに北野さんは教室の壁にかけられた時計を傾けて、次のような話をした。これまで時計は、時計ははかる道具だったかもしれない。けれど傾けたことでそこに新たな意味が加わった。時間を読むには読みにく

い。けれど、ひとはどうして時計が傾いているのか、考え込む。そこに自由がうまれる。アートは上手にデッサンをすることや、きれいな色彩を描きだすことだけではない。このような私たちの経験に意味の変容をもたらすというできごと、それ自体がアートなのだ。授業に参加した生徒たちはそれから一脚の椅子をつかってアートをつくることに集中した。ある生徒は椅子をひっくりかえし、ある生徒は反対向きに椅子に腰掛けてみせた。奇しくも金属と木でつくられた学校にだけみられるそれらの椅子は、いま、行われている交換原理に基づいた学校教育の象徴でもある。その意味をずらしてみせることに夢中になること。生徒たちにとってはそれだけのことだったかもしれないが、私はそこに単なる戯れ以上の意味をどうしても読み込まずにはいられない。

あるいは、批評と解釈を試みる時間に、私が制作した「３枚の鏡」という作品をめぐって生徒たちは熱心に話をしてくれた。作品「３枚の鏡」は、誰もが考えつくような、とてもシンプルな作品だ。まったく同じかたちをした３枚の鏡が、教室には並べられている。１枚目の鏡はふつうの鏡。２枚目の鏡には簡単な加工を施しており、これには像がうつらない。３枚目の鏡は枠だけを残して鏡の部分をくり抜いている。記憶がまちがいでなければ、ある生徒は、これは自分をあらわしているのだという解釈を披露した。自分とは他者を写す鏡だけれども、あるとき、それは中をみとおすことのできない不透明な存在になる。また、あるときは透明にさせられる。そんな、様々な自分のあり方を「３枚の鏡」はあらわしているのだというのが、彼の考えた解釈だ。

北野さんとの制作の授業も、私との批評の授業も、いずれも、いま学校教育や教育サービス業の現場で一般になされる学びとは少し性格が異なっている。けれども、洛星高校の生徒たちはそのような授業を受け容れてくれた。それどころか彼らはそれらの時間を大いに楽しんでいたようにみえた。それは教室に交換原理に貫かれた学びとは別の仕

方の学びが確かに存在したからではないか。そして、引き換えられる知識を積み上げるだけの学びに飽和した彼らはたしかにそのような学びをどこかで欲していたのではないだろうか。

学びとは、おそらく取り外し可能で、どこかに容易に捨ておくことのできるようなものではなく、私たちのからだをそれが形作っているようなものだ。だから、学びを交換原理から取り返すことは、私たち自身の存在を交換原理から取り返すことでもある。私たちは自分で思っているほど、クリエイティブであるとか、創造的であるという意味では、特別な存在ではないのかもしれない。（それどころか、クリエイションということは、そもそも何かを無からつくりだす、ゼロから１を生みだすような作業とは真逆のものであるかもしれない）私たちは年齢を重ねるにつれて、しばしば、自分やひとの凡庸さに落胆させられる。しかし、仮に私たちがどれほど凡庸であるとしても、そして私たちがどのような個性を持つかということとは全く関係なく、私たちが何かと引き換えることのできない存在として生きているというシンプルな原理は成立するし、成立しなければならない。それは生きることの根源的な代替不能性ともいうべきできごとだ。ひとは、そのことを、あるいはかけがえのなさと呼ぶこともできるかもしれない。このかけがえのなさを私たちは自らの生へと取り戻さなくてはならないのである。

おわりに、これは期待と反省と双方の気持ちをこめて書いておきたいのだが、私たちはもっともっと洛星高校で様々なことをすることができる。そこにはたくさんの可能性がある。教育の市場化はますます進行しているが、一方でそれに対抗するオルタナティブな学びの実践もさまざまな場所で、さまざまな仕方で試みられている。私はこの原稿を書くために 2013 年度に実施した洛星高校での授業をふりかえり、資料を見返した。けれども、残念なことに、私は生徒の名前をひとりも思い出すことができなかった。研究室では、多くの場合、洛星高校

の生徒たちのことを「洛星の生徒」という大きな主語で語ろうとする。しかし、当たり前のことだが、私たちが目の前にするひとたちは単に「洛星の生徒」であるという以上の存在である。誰と、何をするのかを「考える」ということも重要なことかもしれない。しかし、それでも目的のために「いま」を見落とすことがあってはならない。生きることは、いつでも考えることに優先する。私たちに必要なのは、洛星高校を考えることではなく、まず洛星高校で生きること、洛星高校を生きることではあるまいか。すべては「いま」「ここ」から出発する。「いま」と真摯に向き合おうとしないことは「未来」を取り逃がすことでもある。

それでは「いま」と「ここ」から出発するために必要なことは何なのか。社会学研究者としての私に伝えられるのは、ひとと会い、ひとの話に耳を傾け、ひとと共に生きるということの大切さだ。そのためには急がないことも重要だ。ひとつひとつの経験に丹念に視線をそそぎ、耳を傾ける。そして、時間をかけること。これまで多くの場合、研究室では授業の実施日と実施時間だけ、洛星高校に足を運んでいたように記憶しているが、もっと彼らと多くの時間をわかちあうことは様々な仕方で可能なはずだ。臨床ということばには色々な意味があるし、その議論は尽きないだろう。しかし、その手前で、私たちには根本的に外に出て「他者」に出会うという経験が不足しているように私には思えて仕方ない。新しくなくてもいい、特別でなくてもいい、これから、洛星高校の生徒とともに真に豊かな学びが展開されることに期待を寄せたい。

（おぎのりょういち）